

## コホーテクすい星報道始末記

奥地 幹 雄\*

“世紀のすい星”という触れ込みでコホーテクすい星が、初めてマスコミに登場してきたのは、今年のちょうど4月ごろであった。そしてこのすい星が、はるか木星軌道のあたりから太陽の方へ向けて長大な放物線的な軌道を描いて近付くにつれて、マスコミによる“コホーテク騒ぎ”は次第に熱を帯びるようになった。

だが、同すい星が太陽に最接近する年末近くになって、いっそう過熱気味となった新聞報道にもかかわらず、肝心のすい星は、年が明けても大方の予想を裏切る明るさにとどまった。「肉眼でも見られる大スペクタクル」のはずだったホウキ星の長大な尾を引く姿には、大ていの人がお目にかかれぬまま、コホーテクすい星は速く飛び去ってしまったのである。

もちろん、東京天文台堂平観測所をはじめ、内外の専門家やアマチュア天文家による写真やスペクトル観測では、極めて貴重な成果が得られたのだという。しかし一般の人々に対するマスコミの報道ぶりは、いささか“カラ騒ぎ”の結果に終わったの感がある。ちょうどその一年余り前、“世紀の宇宙ショー”と期待されながらさっぱり見えなかったジャコビニ流星雨のテツを踏むことになってしまった。

むろんいまでもこうした報道がすべて無意味だなどと思っはてはない。殺ばつな世相をいっときでも忘れさせ、人々の目と心をはるか宇宙のかなたに向けさせる天文の話題は、一服の清涼剤である。そして空を見上げて改めて大気汚染や“光害”のひどさを嘆くといった効用もある。だからたとえ“カラ振り”に終わったといえ、便乗値上げを誘い、モノ不足騒ぎに拍車をかけた一部の“石油バニック報道”に比べれば罪は軽い。それになにも、新聞ばかりが勝手に騒いだわけではなく、専門家にこと外国の一部学者や米航空宇宙局(NASA)などの過大な予測にもその一因があった。われわれマスコミにも“一分の理”はあるのである。

以下は、そういったさまざまな反省や言い訳もこめた、今度のコホーテクすい星報道始末記である。

私の記憶に間違いがなければ、最も早くコホーテクすい星の出現を伝えたのは、昨年4月初めのUPI電であった。さる3月7日西ドイツのハンブルク天文台のコホーテク博士が発見したすい星が、ことし暮れのクリスマス前後に接近し、今世紀最大の天体ショーになるのではないかと期待されている——といった内容である。最接

近の12月27日前後の各6週間は、肉眼でもよく見える明るさになる、とあった。

この段階ではまだ日本の新聞は一般のニュースとしては扱わず、一部地方紙の科学欄向けトピックとして共同通信の翻訳が流れたにとどまった。しかし4月18日の朝刊でY紙は社会面に「今世紀最大のすい星が来る」と大きな見出しで取り上げた。外電をもとに天文台などに補足取材したものと見受けられた。「1910年のハレーすい星をはるかに上回る、並みはずれた大きさと光度をもつすい星が近づいている」という書き出しで、コホーテクすい星が、今年の暮れから来年初めにかけて夜空に豪華な姿を現わし、1月中旬には、今世紀最大の天文スペクタクルを現出しそう——としていた。この記事がいわばその後のコホーテク騒ぎの皮切りとなったからである。

肝心のすい星は、5月以降、地球から見て太陽の向こう側に位置するようになり、9月末にならないと観測できない状態となった。それでもS紙は8月7日付けで、「今世紀最大の明るさと予想されるすい星が太陽に近づいている。半月ほどの明るさのマイナス10等級ほどに輝くと予測する天文学者もおり、明るさは折り紙つき」と書いた。見出しも大きく「ホウキ星がやってくる」「半月ほどの明るさ」「年末には肉眼で見える」とハデにやったが、本文中には、「明るさについては反論もあり、最大でもマイナス3等だという人もいる」ことを付け加えている。

このころ、外電は、楽観的な予測をもとにした記事をしきりに流してきたので、われわれも、東京天文台のすい星の権威に何度も取材してみたが、同氏の意見は意外なほど控え目だった。その理由として同氏はこう説明してくれた。① まだすい星の本体の成分が十分には突き止められてはいない。② すい星の光るのは太陽光の反射によるものと、すい星の分子自身が太陽光に励起されて光を出すものがあり、どちらの作用が光度に大きく効くかわからない。③ 尾の長さも、ガス状物質の量や太陽との距離、太陽活動の強さなどとの関係で大きく変わってくる——などのため、光度や尾の長さの推定は極めて難しいというのである。そして、ウルトラ級の大すい星になると予想されたのに接近してみると、まるで明るくならなかったこれまでのすい星の例もあげて、「だから慎重にしないとんだ見当違いになるんですよ」という。同氏は“今世紀最大”といううたい文句にはかなり懐疑的で、はっきりした見通しは、再び観測が可能にな

\* 共同通信社科学部

る9月末における光度がどれぐらいかによって決まるだろうとのことであった。

9月24日、高知市の関勉さんが再出現してきたコホーテクすい星の撮影に成功した。そしてその後の各地での観測からみて、当初騒がれたほど明るくなりそうにないという予測が、少なくとも日本の専門家の間では強まってきた。これを踏まえた形で10月14日のA紙は、「大物すい星接近中」「正月、金星の明るさ」という見出しで取り上げた。この記事では「超一流のすい星」と表現し、さすがに「今世紀最大」は使っていない。関さんの観測などからみて、初めの予測は少しオーバーだったことがわかり、最大光度はマイナス3～4等程度にとどまる公算が強まった、としている。

このころから東京天文台に対する問い合わせが殺到するようになったこともあって、10月17日、大沢清輝東京天文台長が、それまでの観測状況と、今後の光度予測などについて記者発表をした。内容は、①10月10日未明に堂平観測所の91センチ反射望遠鏡で撮影したのによると、明るさは10等級②肉眼も見える6等級以上になるのは11月末から2月上旬まで③近日点の12月28日にはマイナス3等級と金星並みになる見込み——といったものである。大沢台長によると、当初米スミソニアン天文台などが予測したより光度は下回り、1965年の池谷・関すい星、1970年のベネットすい星に次ぐ、数年に一度といった程度のものになるだろうという。

翌18日の朝刊各紙は、ほぼこの発表を忠実に伝えたが、やはり“今世紀最大”のイメージから抜け切れないせいか、新聞によっては「特に明るくなる12月中旬から1月下旬にかけては雄大な姿が冬の夜空に見られそう」とか、「11月下旬からは、明け方の空にきらめく尾を引いて登場する」など、いぜん過大な期待をもたせる表現も散見された。

一方、外電の方は、第3次スカイラブの3飛行士が宇宙からコホーテクすい星を観測するため打ち上げ日と飛行時間を変更するというNASAの計画への期待もあってか、「今世紀最大の」とか「世紀のすい星」とかいう表現をこの段階でもしきりに使っていた。宇宙船からのすい星観測は初めてだし、学術的意義も大きいのだろうが、NASAとしてはどうやら「落ち目」の有人飛行の人気を盛り上げるために“世紀のすい星”の宇宙観測を“目玉”にしたかったふしもある。だから外電の伝えるNASAの“コホーテク作戦”担当者の光度予測はかなり遅くなってもマイナス5等級とかマイナス10等級といった甘いものであった。

こうした動きにひきずられてか、「肉眼で見え始める」はずだった11月下旬が近づくにつれ、各紙にまた「今世紀最大」的な表現が目立つようになってきた。その中で

SKYLAB 1-7

2ND LD NHA030

BY BRUCE E. HICKS

HOUSTON, JAN. 7 (UPI) -- KOKOUTEK HAS PROVED NOT TO SPECTACLE ONCE PROMISED TO EARTH-BOUND VIEWERS, BUT SP SAY IT HAS YIELDED THE BEST SCIENTIFIC DATA EVER COLLE MAINLY BECAUSE OF THE CLOSE WATCH KEPT BY THE SKYLAB 3

"COMETS ARE LIKE FINGERPRINTS," JOE MICHLOVIC OF THE SPACE FLIGHT CENTER IN HUNTSVILLE, ALABAMA, SAID SUNDAY A LOT OF COMETS AND ALL BEHAVE A LITTLE DIFFERENTLY.

"ALTHOUGH THIS ONE STARTED OUT LIKE A HOUSE ON FIRE OUT A LITTLE QUICK."

THE ASTRONAUTS, GERALD P. CARR, EDWARD G. GIBSON AND POGUE, TRAINED THEIR SOLAR TELESCOPES AT THE DIMINISH FOR THE LAST TIME AND GIBSON SAID THE TRACKING PROGRAM SUCCESSFUL."

スカイラブによるコホーテクすい星の観測を伝えるUPI電。1月7日午前4.45米東部夏時間発

もいささかオーバーだったのは、11月19日のS紙夕刊の「お待ちせ、今月末から登場」「今世紀最大。華麗な宇宙ショー」「尾の長さ天空の6分の1にも」「肉眼でもバッチリ」とうたった特集記事である。本文中ではせっかく東京天文台の控え目な事項についてもかなりの行数をさいているのに、その前半に取り上げた西ドイツのディ・ウェルト紙や米スミソニアン天文台のマースデン博士の予測、外電などの情報に重点を置いた編集になっているのだ。外信部記者の署名入りの記事だけに海外情報が主体になったのかもしれない。

もっとも、科学欄などで取り上げた記事は、各紙かなりしっかりした内容で、すい星一般の解説のほか、その光度予測の難しさにも触れ、ほぼ東京天文台の予測に基づいた線でもとめているのが多かった。それでも、すべて共通していたのは、12月中旬には、明け方の東空、1月7日前後からは夕方の西空にかなりの尾を引く姿がシロウトにも肉眼で十分に見える、といった書き方であった。N紙の11月24日夕刊には天文学者の署名原稿でコホーテクすい星の解説が出たが、ここでも「正月には金星くらいの明るさになり、満月の数倍の長さの尾も見える。天文ファンでなくとも期待する宇宙のショーというべきであろう」と書かれている。文末で一応「どのくらい明るくなるか、どのくらい長い尾が見えるのかを断言するのはむずかしい」と断わってはいるが、「しかし昨年のジャコビニ流星雨のような肩すかしがないことは確かだ」と太鼓判を押した形で終わっている。

さてこうして、11月20日を過ぎると、そろそろ、各地で「コホーテクをつかまえた」「これがコホーテク」といった写真が紙面を飾り始めた。いずれもアマ天文家の撮ったもので、6等級程度なのでかなりボンヤリした。

尾もごく短かいのが見えるだけである。この中で、長野県諏訪のアマ天文家青木正博さんのとった11月24日の写真は、しっぽが2つに分裂しているのがよくわかるきれいなもので、27日S紙や28日M紙などに載った。アマといっても東京天文台から観測依頼を受けるほどのプロ並みの観測者だけに見事なものだ。ただこれらの写真につけられた併用記事は、地方発信のものが多いいせいか、リードにまたぞろ「今世紀最大」とある。どうも目ざわりだ。

われわれとしては、堂平観測所で撮ったきれいな写真も欲しい。東京天文台の天体探索部に問い合わせしてみると、撮影はしてあるが、新聞などに発表することは許されていないという。外電の写真はあちこちの天文台で撮ったものが流されてくる。日本の専門家も撮っているのに紙面に出ないのはおかしいわけだ。どうせ載せるなら12月中旬から観測条件が悪くなる前にとまって頼んでみたが、台長の許可がないと出せないとの話。かなりねばったあげく、共同通信が複写して各社に同時に渡すことを条件に台長のOKもとれた。12日夕刻入手して13日の朝刊に出したが、7日未明に堂平の50センチすい星儀で撮ったものであった。新聞で扱うには通常これだけ古いと“腐って”いるのだが、この写真が年内では最後のもので、次は太陽の向こうを回ったあと、年が明けてからでないと撮れないというので、出稿したのであった。頭の明るさが5等級、尾が4～5度である。

天文台が、天体などの写真を報道用にレリーズしない理由は、研究第一であって学問的な場に発表しないものを一般に出すのは仕事の本義にもとる、ということだと聞いた。一般に出した方がよいと判断した場合はむしろ積極的に文部省や東大の記者クラブなどで発表するというのだ。もう一つ、一社からの要求に応じて出していると、後から後からと欲しがるところや、問い合わせが殺到して本来の研究がおろそかになるということも理由にあげている。確かに一理はあるのだが、研究者が新しい研究をまとめたり、珍しい写真を撮ったのを聞きつけて取材に行っても、すべて上司の許可がいるのでは、窮屈な話だ。昔の天文台はもっとおおらかだったような気がする。

それはともかくコホーテクすい星は、ついに年内は未明の空だったこともあって肉眼で見える状態にはならなかった。しかし年が明けると、7日前後からは、夕方の西空でもあり、だれにでも肉眼で見えるというのでけんめいに目をこらした人も多かっただろう。結果はすでに述べた通り、長い尾を引く姿を肉眼で捕え得た人はごく少なかった。

1月の最初の記事はY紙の5日朝刊。社会面に7段抜きで「西南西に目をこらせ」「あすから肉眼コホーテク」とハズなあおり方。写真もついているが、これはプラネ

タリウム。さらに「デパート、すい星に乗る」とあって1日に3本～5本の望遠鏡が売れてデパートはコホーテクさまさまと書いた。いささかオーバーな表現だ。

ところが皮肉なことにその同じ日、外電は「スカイラブの飛行士からの報告ではコホーテクは急速に光を失い、予想よりはるかに暗くなってしまった」と伝えてきた。控え目だった東京天文台の予想でもこの時期なら1等級か0.5等級ぐらいのはずだったが、すでに3等級程度に暗くなってしまったというのである。そして肉眼観測は難しくなったことも伝えた。まだこのころはすい星の出るあたりは薄明が残っていて見にくく、もう少したって、暗い空に出ようになるころは、光度がさらに落ちるからだ。

6日朝刊でM紙はこの外電を扱い、A紙もこれを踏まえて、光度が落ちたので肉眼では無理といった記事を書いた。これに対してY紙は都会では肉眼だと無理としながらも、6日、8日と続けて写真を載せて、肉眼でも認められたことを報じた。だが写真はどこにすい星があるのかわかりにくいできばえだ。S紙に至っては、7日朝刊で、あまりはっきりしない写真を大きく扱って、「今世紀最大のコホーテクすい星をついに東京上空で初めて本社のカメラが捕えた」と興奮気味。

結局、騒ぎたてたのは新聞だけで、一般の人はいくら西の空にひとみをこらしても、すい星を見つけることはできなかった。もっともY紙の記事で触れているように、大気の汚染されていない人里離れた高地や、天文観測所では、肉眼でもよく見ると発見できたようだ。堂平観測所に聞いてみたら、肉眼でも見えますとのことだった。だが、新聞が書いてきたのは、だれにでも見えるという話である。いまになって都会はスモッグで見えにくいからだ、といってもいい訳にはならない。ましてこの正月は、石油不足で空はいつになくきれいだった。

もちろん最初の方で触れたように、新聞が自分の判断だけで勝手な予測をしたのではない。だから責任の一半は専門家にもあるが、全体としてみると、マスコミの本性としてとかく慎重な見方にくみするより、景気のいい方に傾きがちな面のあることも十分に反省しなければなるまい。騒ぎが一段落したところで、科学欄に、「肉眼で見えなかったわけではない。見方が悪いのだ。基礎的な理学教育の欠陥のせいである」といった趣旨の“総括”をしていた新聞もあったが、果たしてどうだろうか。

なにやらこの一文、同業他紙をあげつらうような形になったが、決してそれが本意ではない。通信社には紙面がないので、具体的には残らないことが多いが、なにによらず似たような誤りを冒しているとの反省は常にある。自戒の気持から出たものであることをご了承いただきたい。